

妹の誕生と入園準備

河合 聡子

四月になり、それまで公園で一緒に遊んでいた友だちが幼稚園に行き始めたのを見聞きしていた娘、恵理子は、次は自分も幼稚園に行く、と決めていました。

一年前、幼稚園が母親と離れて先生や友だちと遊ぶ所だと知って、恵理子が「ママと一緒にいる」と言っていたため、三年保育を見送った時には、行きたくなったら行けばよいと思っていましたが、今年は、友だちに心が向いている恵理子には幼稚園はたくさんさんの友だちがいて嬉し

いに違いないと確信していましたので、迷うこと無く入学願書を提出しました。

入園前にこれだけは、と考えていたことは、元気に「いつてきます」と、私から離れて幼稚園へ行けることでした。離れなくては困るというのではなく、新しい世界に晴れやかな気持ちで入って行って欲しいという願いでした。

性格なのか育て方なのか、恵美子は同年齢の子どもの

中でも、ひときわ、母親から離れにくい子どもでした。乳児健診で体重を計る時、私の手が離れると大泣きしましたし、二歳を過ぎた頃、ゴールで母親が迎える形のかげっこでも、恵美子だけが私の手を離さず、一緒に走りました。三歳になった頃は仲良しの友だちの家では私がいなくても遊んでいられたが、慣れないところでは、私にびったりくっついていました。公園で遊んでいた同じ学年の友だちが幼稚園に通い始めた同時期に参加した、児童館での幼児クラブでもそうでした。幼児クラブは毎週一回親子で参加します。中心になる先生がひとりと補助の先生が三人、三十組の親子、いつも決まったメンバーで一年間を通しての活動でした。始まった当初は、前に立っている先生にぶつかるくらい前に出て体操している子どもがいる一方で、恵理子は私の横にくっついてたまま、つまり子どもの列としては一番後ろにいました。

二歳を過ぎるまで三時間おきに母乳を飲んでた恵理子は、当然三時間以上私と離れて過ごしたことはありません

せんでしたし、断乳後も、昼間父親と過ごすことがあっても、夜、私が不在のことはありませんでした。また、私は、二歳七か月違いの弟がうまれたとき、病院へ見舞いに行く父を泣きながら追いかけたり、欲求不満からマッドレスに針を差しまくったという話を聞いていましたので、恵理子のストレスを少しでも減らしたいと考えました。診察を受けていた病院は夫の勤める会社の病院でした。看護婦さんの人数も充分で、親切なこと、洗濯もすべてしていただけること、お産に関して自分の希望をかなり叶えてもらえそう等、いいことばかりだったのですが、病室には子どもは入れないきまりになっていました。談話室で面会はできるのですが、新生児には会えません。夜、恵理子が「ママがいない」と泣き疲れて眠ってしまったもしかたがないかもしれないのですが、やはり私には耐えられないことでした。もしどうしようもなくなったら泊まれそうな所、会いたいときはいつでも面会できる所ということで、出産三か月前になって自宅から車で十分程の助産院にお世話になることにしまし

た。

出産一か月前、幼稚園の入園審査と面接がありました（その頃は、恵理子も幼児クラブでも最前列で踊るようになっていました）。子どもが先生と遊んでいる間、親は隣の部屋で待つこととなります。親子で面接をするだけだと思っていましたので、恵理子にも何も言っていないでしたが、子どもの部屋に吸い込まれるように入って行ってしまいました。あっけない別れで、「えりちゃん」と呼びかけてしまったくらいでした。「えりこがね」「えりこがね」という大きな声が隣の部屋から聞こえてきました。迎えに行くときまだ遊び足りない表情をしていました。

同じ日、助産院を訪ねると、なるべく安静にしているように言われました。予定日よりかなり早く出てきてしまいそうだというのです。児童公園通いや、動物園や水族館、美術館、遊園地など思いつくまま出歩く毎日でしたが、この日から電車やバスに乗っての外出を控えることになりました。出産当日までは恵理子が私と思う存分

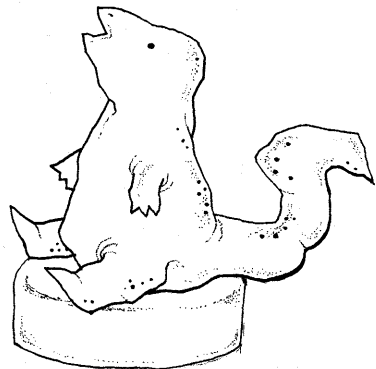
楽しく過ごせるように思っていた私にとっては、やり残したことがたくさんあるような気がして焦りましたが、どうすることもできません。二週間後の幼児クラブでの遠足の付添いも控え、他のお母様に頼むことにしました。しかし、他のお友だちは皆母親と一緒に帰るのかという私の心配をよそに、恵理子は遠足から帰ったその足で、友達の家に行っていました。これなら、幼稚園へ私から元気に離れて行くという気持ちになりました。

十二月迄はおなかに入れてもらいましょう、という言葉がわかったのか、第二子、真悠子は十二月二日に生まれました。夜中の出産でしたが恵理子も立会い、最初にいい子と頭をなでていました。出産後も二時間ほど私のそばに居てくれて静かに帰っていきました。五日間の入院中、恵理子は父親と二人で過ごしました。海外出張も断り、恵理子とことん過ごそうとしていた父親の気持ちだが、私の不在を不安なものにしなかったのでしょう。

毎日訪ねてくれましたが、一度も帰りたくないと言ったことはありませんでした。

退院して一か月間は、娘二人と私は、私の実家で暮らしました。私の母が体調が優れないため家のことのほとんどは父がこなし、恵理子と真悠子の入浴も引き受けてくれました。外遊びもさせてくれましたし、図書館や森林公園、小動物園などへも連れて行ってくれました。真悠子が昼間、ずっと眠っていたこともありましたが、恵理子は自分のペースで力一杯遊んでいました。私もなにより恵理子が楽しく遊んでいるのが嬉しく、穏やかな日々を過ごせました。

思う存分、休養させてもらった後、自分の家に戻ってからは大変さを感じました。恵理子と私、真悠子と私という二つの別々の関わりではなく、恵理子と真悠子の二人の関わりの中に私に関わっていける形になればいいと考えていましたが、それには、真悠子が小さすぎました。恵理子は外で友だちと遊びたがりですが、鼻がつまり気味で母乳を飲むのも苦しそうな真悠子を寒空の下に



出す気にはなれません。それでも我慢ばかりはさせられません。真悠子を部屋に置いたまま、トランシバーにあって泣き声がかかる機械を持って隣の公園でブランコに乗ったこともありました。ほんの少しの時間でも

気が晴ればと家の周りをひとまわりして雑草を摘んだこともありました。友だちのお母様に一緒に見て頂くこともありました。また、幼児クラブも室内の活動でしたので、すぐに通い始めました。新生児から使用できるベルトですつとだっこされて真悠子もたいへんだったと思います。

昼間、親子三人で過ごす時は恵理子の心が充分満たされていなかったかもしれません。保護する度合いは真悠子に対する方が大きくなりますから、公平に思ってもどうしても恵理子に我慢させてしまうことは私にも大きなストレスでした。また、ママを取られたうえに自分幼稚園に行かされる、という思いを恵理子に少しでも抱かせてしまうことをおそれました。夫が休みの時は、真悠子と留守番してもらい、恵理子と買い物に行ったり、いつもは、見守るだけになっていた公園でも、スコップを持って砂遊びをしたり、恵理子と私の二人で過ごす時間もつくりました。

私が幼稚園の入園のために用意したのは、毎日を丁寧

に送っていくということでした。時がくれば親が引き止めても離れていく、早く離そうと無理をすれば、それが不安を生み人への信頼を揺るがすことになると考えていました。早く離れてくれるといいというのではなく、いつも安心して生活してほしい。無理には離れてほしくない。一緒にいたい時に一緒にいられるような毎日を送りたい。その時々を充実して生きていければ幼稚園入園や下の子の出産など、新しい場面で、初めは多少の混乱があつたとしても必ず乗り越えられると思っていました。また、幼稚園に対して楽しいイメージを持ち続けて欲しかったので、恵理子ができないことで「幼稚園に行つてから困るわよ」ということは言わないようにしました。

緊張して私がしつかり手をつないでいた入園式でしたが、保育室ではままごとのおもちゃで遊び始めていました。翌日からは、父親が幼稚園まで送りとどけることになっていました。三月に転居し遠方になり、やっと首が

すわった真悠子をラッシュ時の電車にのせられないという理由からでした。第一日目、ニコニコと起きてきて父親を早く早く、と急がし、意気揚々とでかけていきましました。迎えに行くとも冴えない表情をしている恵理子。その後「今日は休みにしようかな」ととほけた様子で言ってみたり、「ママも来て」とせがんだりする朝が続きました。本当に苦痛であるなら休んでもよいと思っ
ていましたが、「行く日にしてもいいのよ」と誘ったり、玄関に出てエレベーターの前で見送ったり、電車の隣の駅まで行ったりしました。一週間も経たない日、それまでとは違いニコニコ顔で帰ってきました。私と手をつなぐと、「恵理子ね、幼稚園に馴れた」と、ひとこと。一週間、恵理子が、心をくだき見守り支えてくださった先生のもとで、心を使い頭を働かせていたことに、その時気がつきました。私がしてあげられたことの何と少ないことか、ということもしみじみ感じました。親としてあれこれ気を配ったつもりでしたが、あたえられただけでなく、恵理子自身がつかんでいったものは大きかっ

たのです。

入園準備というを入園までのこと、と思っていました
が、元氣な「行ってきます」を聞くための心遣いは毎日
続くということを改めて感じています。

(保育研究グループはるにれ)